微細化による特性への影響

群馬大学松田順一

概要

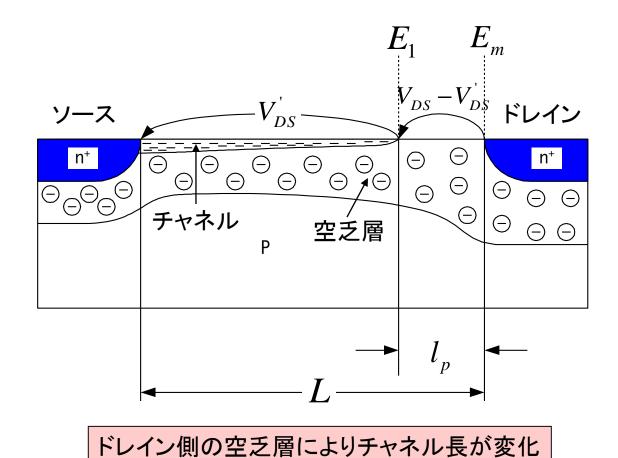
- ・ チャネル長変調
- 短チャネルデバイス
 - 短チャネル効果(電荷配分)、ドレイン~ソース電圧の効果、逆短チャネル効果
- 狭チャネルデバイス
 - 狭チャネル効果、逆狭チャネル効果
- ・パンチスルー
- キャリア速度飽和
- ホットキャリア効果
- ・スケーリング
- ソースとドレイン抵抗
- 薄い酸化膜と高ドーピング効果
- ・ 微細物理モデルの統合
- 付録
 - BSIMでの閾値電圧(短チャネル効果: 擬似2次元)

(注)以下の本を参考に、本資料を作成。

- (1) Yannis Tsividis, Operation and Modeling of the MOS Transistor Second Edition, McGraw-Hill, New York, 1999.
- (2) Yannis Tsividis and Colin McAndrew, Operation and Modeling of the MOS Transistor Third Edition, Oxford University Press, New York, 2011.

チャネル長変調

(CLM: Channel Length Modulation)



ピンチオフ領域の長さ導出(1次元解析)

チャネル方向x:ドレイン方向正)のポアソンの方程式を解く。 ピンチオフ点をx=0とし、境界条件を

$$E = -E_1 \quad (x = 0)$$

ピンチオフ領域にかかる電圧 : $V_{DS} - V_{DS}$ とすると、ピンチオブ領域の長さ l_p は

$$l_{p} = \sqrt{\frac{2\varepsilon_{s}}{qN_{A}}} \left[\sqrt{\phi_{D} + \left(V_{DS} - V_{DS}^{'}\right)} - \sqrt{\phi_{D}} \right]$$

となる。ここで、 ϕ_D は以下で表される。

$$\phi_D = \frac{\varepsilon_s E_1^2}{2qN_A}$$

(注) ピンチオフより先にキャリア速度飽和が起こる場合、 E₁をそれが起こる電界の値に置き換える。

チャネル長変調による飽和電流(1)

飽和領域の電流 I_{DS} は、 l_p を用いて以下の如く表される。

$$I_{DS} = I_{DS} \frac{L}{L - l_p}$$
 または $\frac{I_{DS}}{1 - l_p/L}$

 l_p/L ≪1の場合、

$$I_{DS} \approx I_{DS} \left(1 + \frac{l_p}{L} \right)$$

で近似できる。(この形がコンピュータ計算上好まれる。) ここで、 l_n を以下の形にして用いる。

$$l_{p} = \frac{B_{1}}{\sqrt{N_{A}}} \left[\sqrt{\phi_{D} + \left(V_{DS} - V_{DS}^{'}\right)} - \sqrt{\phi_{D}} \right]$$

 $B_1 = (2\varepsilon_s/q)^{1/2}$ で定数であるが、これと ϕ_D は、実測値(電流)に合うように選ばれる。

チャネル長変調による飽和電流(2)

 $l_p E V_{DS} = V_{DS}$ の周りでテイラー展開すると、以下になる。

$$l_{p}(V_{DS}) = \frac{B_{1}}{\sqrt{N_{A}}} \left[\sqrt{\phi_{D} + (V_{DS} - V_{DS})} - \sqrt{\phi_{D}} \right]$$

$$\approx l_{p} \left(V_{DS}^{'} \right) + \frac{B_{1}}{\sqrt{N_{A}}} \frac{1}{2\sqrt{\phi_{D} + \left(V_{DS} - V_{DS}^{'} \right)}} \Big|_{V_{DS} = V_{DS}^{'}} \left(V_{DS} - V_{DS}^{'} \right) = \frac{B_{1}}{\sqrt{N_{A}}} \frac{\left(V_{DS} - V_{DS}^{'} \right)}{2\sqrt{\phi_{D}}}$$

 I_{DS} は、以下となる。

$$I_{DS} \approx I_{DS}^{'} \left(1 + \frac{l_p}{L}\right) \approx I_{DS}^{'} \left[1 + \frac{1}{L\sqrt{N_A}} \frac{B_1}{2\sqrt{\phi_D}} \left(V_{DS} - V_{DS}^{'}\right)\right] = I_{DS}^{'} \left[1 + \left(V_{DS} - V_{DS}^{'}\right)/V_A\right]$$

となる。ここで、 V_A は以下で表される。

$$V_{A}=B_{2}L\sqrt{N_{A}}$$
,(但し、 $B_{2}=2\sqrt{\phi_{D}}/B_{1}$)

チャネル長変調による飽和電流(3)

飽和電流Insを以下のようにも表す。

$$I_{DS} = I_{DS} \left[1 + \left(V_{DS} - V_{DS} \right) / \left(V_A + V_{DS} \right) \right]$$

または、

$$I_{DS} = \hat{I}_{DS} \left[1 + \left(V_{DS} - \hat{V}_{DS} \right) / \left(V_A + \hat{V}_{DS} \right) \right] \qquad (V_{DS} > \hat{V}_{DS})$$

$$\hat{I}_{DS} = \frac{W}{L} \mu C_{ox} \left[\left(V_{GS} - V_T \right) \hat{V}_{DS} - \frac{\alpha}{2} \hat{V}_{DS}^2 \right]$$

上記の飽和領域と以下の非飽和領域の電流式

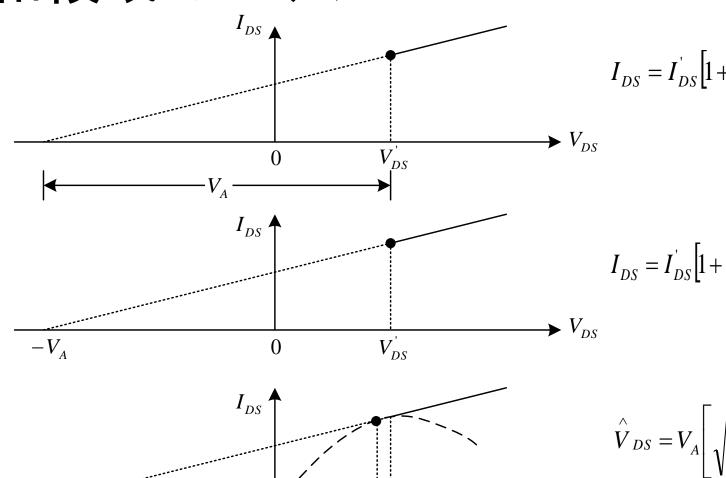
$$I_{DS} = \frac{W}{L} \mu C_{ox} \left[(V_{GS} - V_T) V_{DS} - \frac{\alpha}{2} V_{DS}^{2} \right] \qquad (V_{DS} \le \hat{V}_{DS})$$

の dI_{DS}/dV_{DS} を等しいとして \hat{V}_{DS} を求めると、以下になる。

$$\hat{V}_{DS} = V_A \left[\sqrt{1 + \frac{2(V_{GS} - V_T)}{\alpha V_A}} - 1 \right]$$

飽和領域のモデル

 $-V_{_A}$



$$I_{DS} = I_{DS} [1 + (V_{DS} - V_{DS})/V_A]$$

$$I_{DS} = I_{DS} \left[1 + \left(V_{DS} - V_{DS} \right) / \left(V_A + V_{DS} \right) \right]$$

$$\hat{V}_{DS} = V_A \left[\sqrt{1 + \frac{2(V_{GS} - V_T)}{\alpha V_A}} - 1 \right]$$

ピンチオフ領域の長さ導出(:2次元解析)

2次元解析により l_p を導出すると、 l_p は以下になる * 。

$$l_p = l_a \ln \frac{\left[\left(V_{DS} - V_{DS}^{'} \right) / l_a \right] + E_m}{E_1}$$

$$E_{m} = \sqrt{\frac{\left(V_{DS} - V_{DS}^{'}\right)^{2}}{l_{a}^{2}} + E_{1}^{2}}, \quad l_{a} = \sqrt{\frac{\varepsilon_{s}}{\varepsilon_{ox}} t_{ox} d_{j}} \approx \sqrt{3t_{ox} d_{j}}$$

ここで、 E_m はx方向の最大電界、 d_i はドレインの接合深さ、

E」は電子または正孔の速度飽和時の電界である。

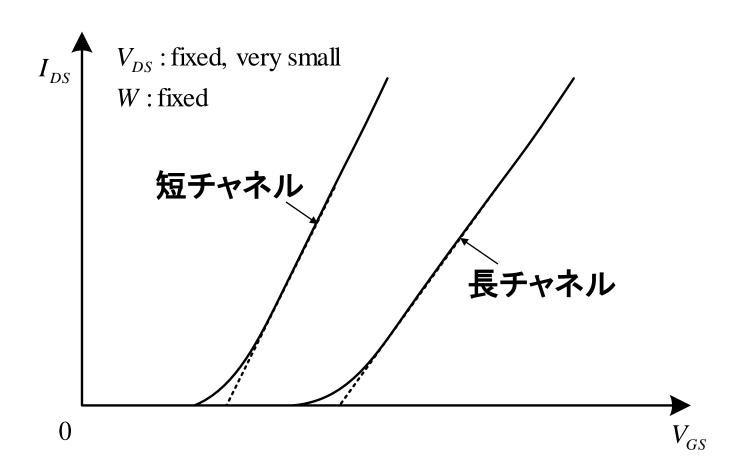
ここで、
$$E_m \delta E_1 + (const) [(V_{DS} - V_{DS})/l_a]$$
で近似すると、 l_p は

$$l_p = l_a \ln \left[1 + \frac{V_{DS} - V_{DS}}{V_E} \right]$$

となる。 V_E は実験的に決められる。

^{*}Y. A. Elmansy and A. R. Boothroyd, "A Simple two-dimensional model for IGFET operation in the saturation region," IEEE Transaction on Electron Devices, vol. ED-24, pp.254-262, 1977.

チャネル長の違いによるI_{DS} vs.V_{GS}特性



短チャネル効果(電荷配分:1)

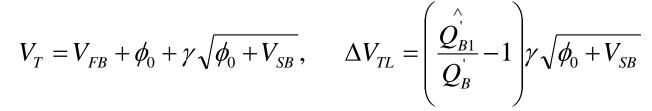
短チャネルトランジスタの実効閾値電圧 $\hat{V_T}$ は、

$$\hat{V_T} = V_{FB} + \phi_0 + \frac{\hat{Q_{B1}}}{\hat{Q_B}} \gamma \sqrt{\phi_0 + V_{SB}}$$

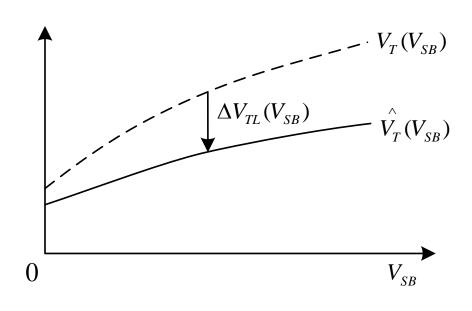
である。ここで、 $\hat{Q_{B1}}$ は実効空乏層電荷であり、

 $\stackrel{\wedge}{V_{\scriptscriptstyle T}}$ はまた、

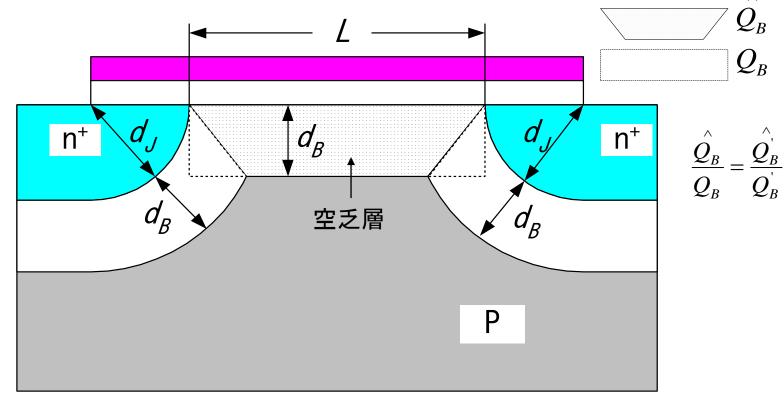
$$\hat{V_T} = V_T + \Delta V_{TL}$$
で表される。ここで、



である。 ΔV_{TL} は閾値電圧の変化量を表す。



短チャネル効果(電荷配分)



$$\hat{V_T} = V_{FB} + \phi_0 + \frac{\hat{Q_{B1}}}{\hat{Q_B}} \gamma \sqrt{\phi_0 + V_{SB}} \qquad \qquad \hat{Q_B} / \hat{Q_B} = 1 - \frac{d_j}{L} \left(\sqrt{1 + \frac{2d_B}{d_j}} - 1 \right)$$

短チャネル効果(電荷配分:2)

$$\hat{Q_B}/Q_B$$
の導出: 空乏層幅 d_B は

$$d_B = \zeta \sqrt{\phi_0 + V_{SB}}$$
 (但し、 $\zeta = \sqrt{\frac{2\varepsilon_s}{qN_A}}$)

である。これを使うと $\hat{Q_{\scriptscriptstyle B}^{'}}/\hat{Q_{\scriptscriptstyle B}^{'}}$ は

$$\hat{Q_B} / \hat{Q_B} = 1 - \frac{d_j}{L} \left(\sqrt{1 + \frac{2d_B}{d_j}} - 1 \right)$$

となる。 $2d_B/d_j \ll 1$ の場合、 $\hat{Q_B}/\hat{Q_B}$ は

$$\hat{Q_B} / \hat{Q_B} \approx 1 - \frac{d_B}{L}$$

で近似される $2d_B/d_j$ が大きい場合も考慮して、以下で表す。

$$\hat{Q_B}/Q_B = 1 - \beta_1 \frac{d_B}{L}$$
 (但し、 β_1 は定数)

短チャネル効果(電荷配分:3)

 $eta_{\!\scriptscriptstyle I}$ を含む $\hat{Q_{\!\scriptscriptstyle B}^{'}}/Q_{\!\scriptscriptstyle B}^{'}$ の近似式を用いると $\hat{V_{\!\scriptscriptstyle T}}$ は

$$\hat{V_{T}} = V_{FB} + \phi_{0} + \gamma \sqrt{\phi_{0} + V_{SB}} \left(1 - \frac{\beta_{1} \zeta}{L} \sqrt{\phi_{0} + V_{SB}} \right)$$

となる。また、 ΔV_T は以下の如くになる。

$$\Delta V_{TL} = -2\beta_1 \frac{\varepsilon_s}{\varepsilon_{ox}} \frac{t_{ox}}{L} (\phi_0 + V_{SB})$$



$$\Delta V_{TL} \propto 1/L$$

短チャネル効果(ドレイン~ソース電圧の影響)

ドレイン電圧が増大した場合、 $\hat{Q_{\scriptscriptstyle B}}/Q_{\scriptscriptstyle B}$ は以下になる。

$$\hat{Q_B}/\hat{Q_B} = 1 - \beta_1 \frac{1}{L} \frac{d_{BS} + d_{BD}}{2}$$
 (但し、 β_1 は定数)

ここで、 d_{RS} と d_{RD} はそれぞれソース側とドレイン側の空乏層幅であるため、

$$\frac{d_{BS} + d_{BD}}{2} = \frac{\zeta}{2} \left(\sqrt{\phi_0 + V_{SB}} + \sqrt{\phi_0 + V_{DB}} \right) \quad (\triangle \ \ \, V_{DB} = V_{DS} + V_{SB})$$

$$\cong \zeta \left(\sqrt{\phi_0 + V_{SB}} + \frac{\beta_2 V_{DS}}{\sqrt{\phi_0 + V_{SB}}} \right)$$
 (但し、 $\beta_2 = 0.25$)

となる。上記近似は V_{DS} が小の場合に成り立ち $\hat{V_T}$ と ΔV_{TL} は以下になる。

$$\hat{V_{T}} = V_{FB} + \phi_{0} + \gamma \sqrt{\phi_{0} + V_{SB}} \left[1 - \frac{\beta_{1} \zeta}{L} \left(\sqrt{\phi_{0} + V_{SB}} + \frac{\beta_{2} V_{DS}}{\sqrt{\phi_{0} + V_{SB}}} \right) \right]$$

$$\Delta V_{TL} = -2\beta_1 \frac{\varepsilon_s}{\varepsilon_{ox}} \frac{t_{ox}}{L} \left[\left(\phi_0 + V_{SB} \right) + \beta_2 V_{DS} \right]$$

短チャネル効果(ドレイン~ソース電圧の影響:2次元解析)

擬似 2 次元解析によると、 ΔV_{TL} は以下の如くになる * 。

$$\Delta V_{TL} \approx -\left[3(\phi_{bi} - \phi_0) + V_{DS}\right]e^{-L/\lambda}$$

ここで、 ϕ_{bi} はソースまたはドレインとチャネル間の接合電位であり、

λ (特性長: Characteristic length) は以下である。

$$\lambda = \sqrt{\frac{\varepsilon_{s} t_{ox} d_{B}}{\varepsilon_{ox} \beta_{3}}}$$

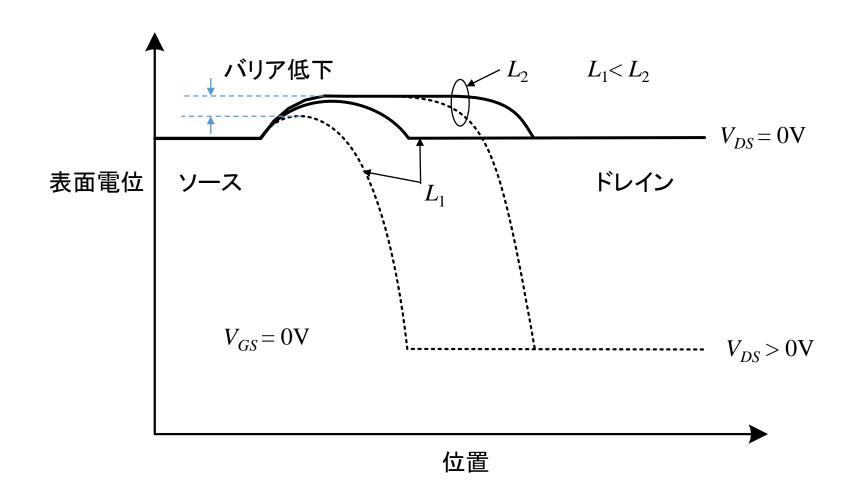
ここで、 d_B はチャネル下の空乏層深さであり、 β_3 (≈ 1)はフィッティングパラメータである。

なお、上記 ΔV_{TL} は $L\gg d_B$ で成立する。

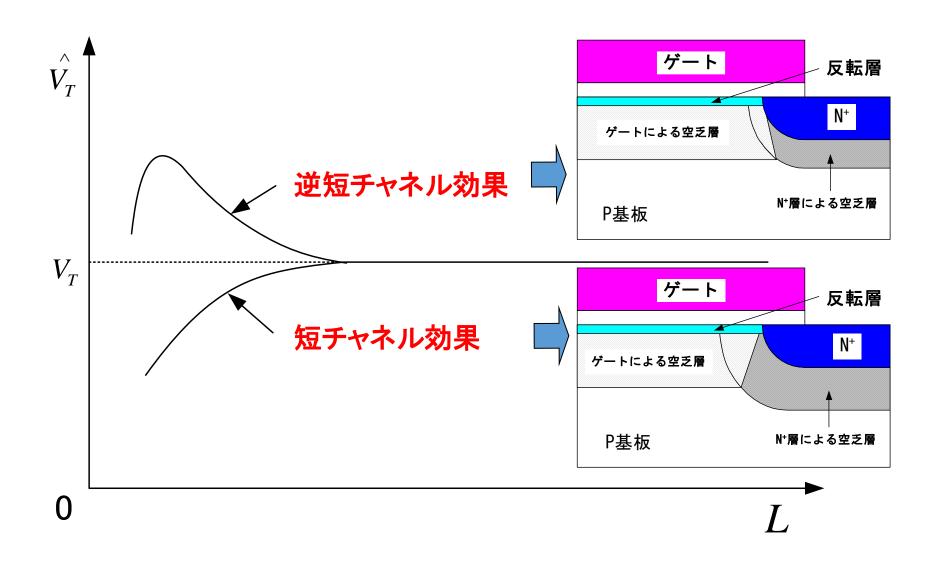
*Z-H Liu, et. Al., "Threshold voltage model for deep-submicrometer MOSFET's," IEEE Transaction on Electron Devices, Vol. 40, pp.86-95, 1993.

トレイン電圧/短チャネル化によるバリア低下

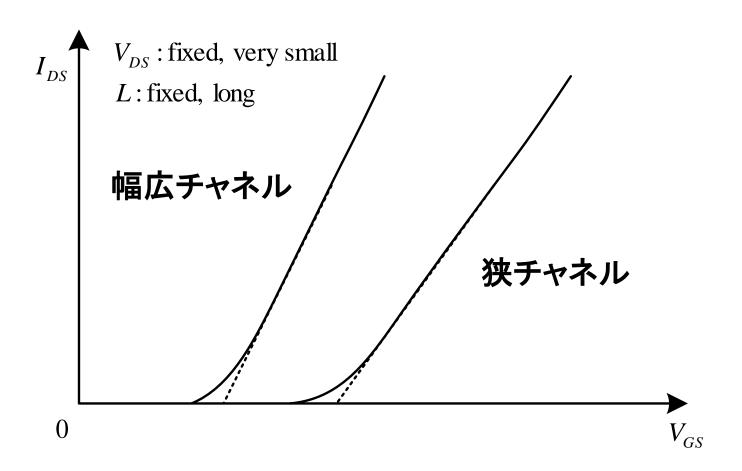
(DIBL: Drain Induced Barrier Lowering)



短/逆短チャネル効果



チャネル幅の違いによるI_{DS} vs.V_{GS}特性



LOCOS分離の狭チャネル効果(1)

狭チャネルトランジスタの

実効閾値電圧 $\hat{V_T}$ は、

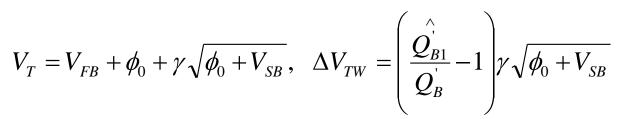
$$\hat{V_T} = V_{FB} + \phi_0 + \frac{\hat{Q_{B1}}}{\hat{Q_B}} \gamma \sqrt{\phi_0 + V_{SB}}$$

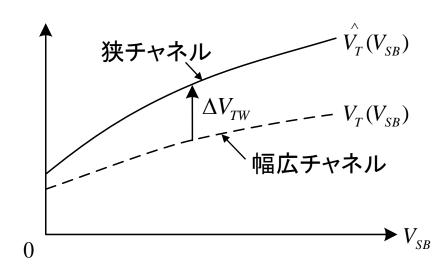
である。ここで、 $\hat{Q_{\mathtt{R}1}}$ は、実効空乏層電荷であり、

$$\hat{Q_{B1}}/Q_{B}$$
 >1である。 $\hat{V_{T}}$ はまた、

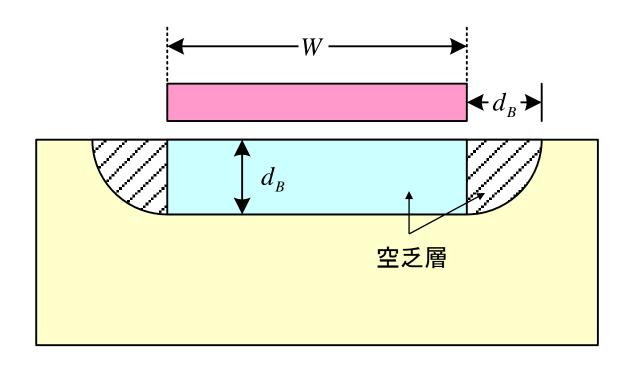
$$\stackrel{\smallfrown}{V_T} = V_T^{} + \Delta V_{TW}^{}$$

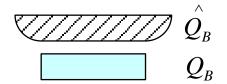
で表される。ここで、 V_T と ΔV_{TW} は以下である。





狭チャネル効果(電荷配分)





$$\stackrel{\wedge}{Q_B} = \stackrel{\wedge}{Q_B}$$

LOCOS分離の狭チャネル効果(2)

LOCOSの場合、 $\hat{Q_{B1}}/Q_{B}$ を以下の如く近似できる。

$$\frac{\hat{Q_{B1}}}{\hat{Q_{B}}} = 1 + \beta_4 \frac{\pi}{2} \frac{d_B}{W}$$

ここで、β」は通常1であり、フィティングパラメータとして用いる。

これから $\hat{V_T}$ は以下になる。

$$\hat{V_T} = V_{FB} + \phi_0 + \gamma \sqrt{\phi_0 + V_{SB}} \left(1 + \beta_4 \frac{\zeta \pi}{2W} \sqrt{\phi_0 + V_{SB}} \right)$$

また、 ΔV_{TW} は以下になる。

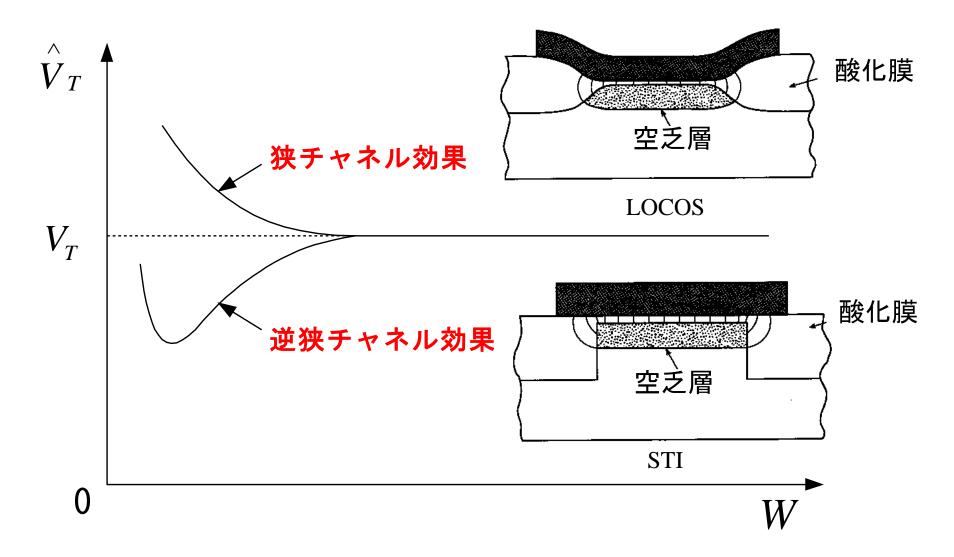
$$\Delta V_{TW} = \beta_4 \frac{\zeta \pi}{2W} \sqrt{\phi_0 + V_{SB}} \gamma \sqrt{\phi_0 + V_{SB}}$$
$$= \beta_4 \pi \frac{\zeta \gamma}{2W} (\phi_0 + V_{SB}) = \beta_4 \pi \frac{\varepsilon_s}{\varepsilon_{ox}} \frac{t_{ox}}{W} (\phi_0 + V_{SB})$$

$$d_{B} = \zeta \sqrt{\phi_{0} + V_{SB}}$$

$$\zeta = \sqrt{\frac{2\varepsilon_{s}}{qN_{A}}}$$

$$\gamma = \frac{\sqrt{2q\varepsilon_{s}N_{A}}}{C_{ox}'}$$

狭/逆狭チャネル効果



STI分離の狭チャネル効果(1)

STIの場合の狭チャネル効果による $\hat{V_T}$ は、以下である。

$$\hat{V}_{T} = V_{FB} + \phi_{0} - \frac{Q_{B}}{C_{ox}'WL + 2C_{F}}$$

ここで、 C_F はフリンジング容量である。 $\hat{V_T}$ はまた、以下で表される。

$$\hat{V_T} = V_{FB} + \phi_0 - \frac{\hat{Q}_{B1}}{\hat{C}_{ox}WL}$$

ここで、 \hat{Q}_{BI} は実効空乏層電荷である。上2式を比較して、以下を得る。

$$\frac{\hat{Q}_{B1}}{Q_{B}} = \frac{C_{ox}^{'}WL}{C_{ox}^{'}WL + 2C_{F}} < 1$$

STI分離の狭チャネル効果(2)

 C_F は、以下である * 。

$$C_F = \frac{2\varepsilon_{ox}L}{\pi} \ln \left(\frac{2t_{Fox}}{t_{ox}}\right)$$

ここで、 t_{Fox} はフィールド酸化膜厚である。この C_F から以下を得る。

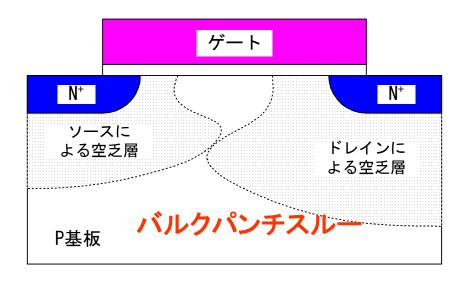
$$\frac{\hat{Q}_{B1}}{Q_{B}} = \frac{W}{W + F},$$
 但以, $F = \frac{4t_{ox}}{\pi} \ln \left(\frac{2t_{Fox}}{t_{ox}} \right)$

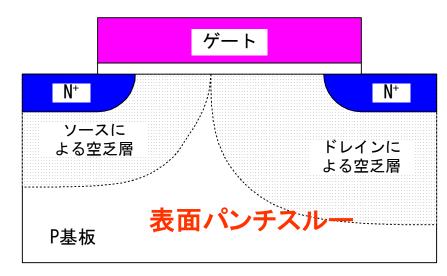
したがって $\hat{V_T}$ は、以下の如くになる。

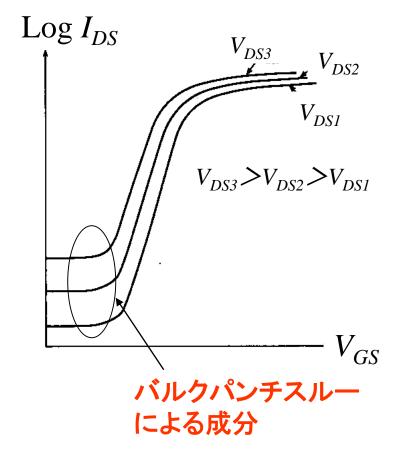
$$\stackrel{\wedge}{V_{T}} = V_{FB} + \phi_{0} + \gamma \sqrt{\phi_{0} + V_{SB}} \frac{W}{W + F}$$

^{*} L. A. Akers, et. al., "Characterization of the inverse-narrow-width effect," IEEE Transaction on Electron Devices, vol. ED-34, pp. 2476-2484, 1987.

パンチスルー







キャリアの速度飽和

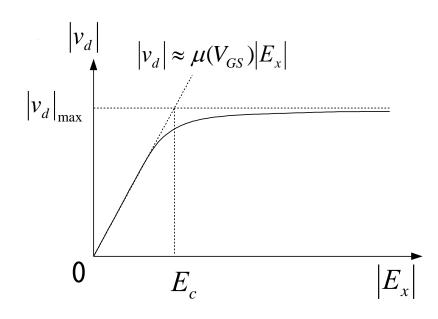
キャリアの速度飽和を含む電流式

$$I_{DSN,$$
速度飽和を含む $=rac{I_{DSN,$ 速度飽和を含まない}}{1+V_{DS}/{\left(LE_c
ight)}}

電界が臨界電界より小: $\left|E_{x}\right| \ll E_{c} \Longrightarrow \left|v_{d}\right| pprox \mu \left|E_{x}\right|$

電界が臨界電界より大: $\left|E_{x}\right|\gg E_{c}\Longrightarrow\left|v_{d}\right|\approx\left|v_{d}\right|_{\max}$

臨界電界: $E_c = \frac{|v_d|_{\text{max}}}{\mu}$



キャリア速度飽和の解析(1)

 $|v_a|$ を経験的な以下の関係式で表す。

$$|v_d| = |v_d|_{\text{max}} \frac{|E_x|/E_c}{1 + |E_x|/E_c}$$

ここで $|\mathbf{E}_x| = dV_{CB}/dx$ であるから、

$$|v_d(x)| = |v_d|_{\text{max}} \frac{(1/E_c)(dV_{CB}/dx)}{1 + (1/E_c)(dV_{CB}/dx)} = \mu \frac{(dV_{CB}/dx)}{1 + (1/E_c)(dV_{CB}/dx)}$$

となる。一方、非飽和領域での電流psnは

$$I_{DSN} = W(-Q_I)v_d(x)$$

であるから、

$$I_{DSN}\left(1 + \frac{1}{E_c} \frac{dV_{CB}}{dx}\right) = \mu W\left(-Q_I\right) \frac{dV_{CB}}{dx}$$

となる。これを、 $x = O(V_{CB} = V_{SB})$ から $x = L(V_{CB} = V_{DB})$ まで積分する。

キャリア速度飽和の解析(2)

積分の結果、以下を得る。

$$I_{DSN}\left(L + \frac{\left(V_{DB} - V_{SB}\right)}{E_c}\right) = \mu W \int_{V_{SB}}^{V_{DB}} \left(-Q_I\right) dV_{CB}$$

$$I_{DSN} = \frac{W}{L} \frac{\mu}{1 + V_{DS} / (LE_c)} \int_{V_{SB}}^{V_{DB}} (-Q_I) dV_{CB}$$

ここで、 $V_{DB} - V_{SB} = V_{DS}$ である。この式を完全対称強反転モデルの式

$$I_{DSN} = \frac{W}{L} \int_{V_{SR}}^{V_{DB}} \mu \left(-Q_{I}\right) dV_{CB} \qquad (直接導出)$$

とμを一定として比較すると、以下になる。

$$I_{DSN,including}$$
 velocity saturation $= \frac{I_{DSN,not}$ including velocity saturation $1 + V_{DS} / (LE_c)$

キャリア速度飽和の解析(3)

簡単化されたソース参照強反転モデルの式に速度飽和効果を入れると、

$$I_{DS} = \frac{W}{L} \frac{\mu C_{ox} \left[(V_{GS} - V_T) V_{DS} - \frac{\alpha}{2} V_{DS}^2 \right]}{1 + V_{DS} / (LE_c)}, \quad V_{DS} \leq V_{DS}'$$

となる。 $dI_{DS}/dV_{DS}=0$ から飽和時の $V_{DS}(=V_{DS})$ は以下になる。

$$V_{DS} = \frac{V_{GS} - V_T}{\alpha} \frac{2}{\sqrt{1 + \left(\frac{V_{GS} - V_T}{\alpha}\right) \cdot \frac{2}{LE_c} + 1}}$$

また、飽和時の電流は V_{DS} を V_{DS} に、Lを $L-l_p$ に置換えて、以下になる。

$$I_{DS} = \frac{W\mu C_{ox}^{'} \left[(V_{GS} - V_T)V_{DS}^{'} - \frac{\alpha}{2}V_{DS}^{'2} \right]}{L \left(1 - \frac{l_p}{L} + \frac{V_{DS}^{'}}{LE_c} \right)}$$

キャリア速度飽和の解析(4)

Lが小さくなると、 V_{DS} も小さくなる。したがって、 I_{DS} は

$$I_{DS} \approx \frac{\mu C_{ox}'(W/L)(V_{GS} - V_T)V_{DS}'}{V_{DS}'/(LE_c)} \approx WC_{ox}'(V_{GS} - V_T)\mu E_c$$

で近似できる。ここで、 l_p/L \ll 1と仮定してある。

すなわち、 I_{DS} は $V_{GS}-V_T$ にほぼ比例する。

ここで、チャネル電荷が場所xに依存しなく、一定であるとすると、

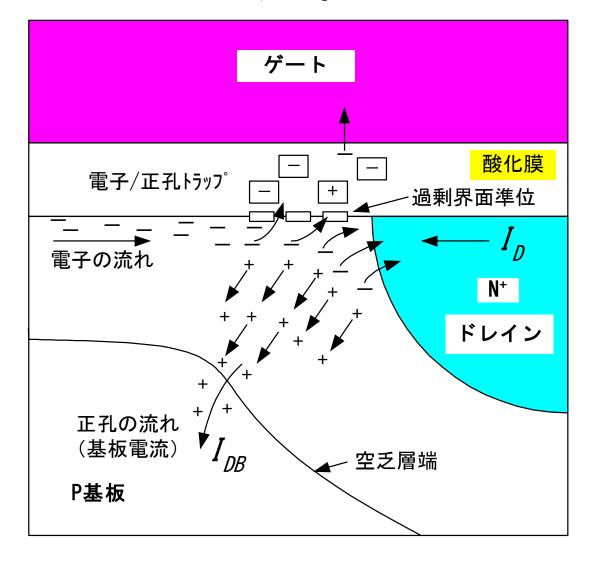
$$-Q_I^{'} pprox C_{ox}^{'}(V_{GS}-V_T)$$
であるから、以下を得る。

$$I_{DS} \approx W(-Q_I)v_d|_{\text{max}}$$

/应5-V应特性:速度飽和の有無

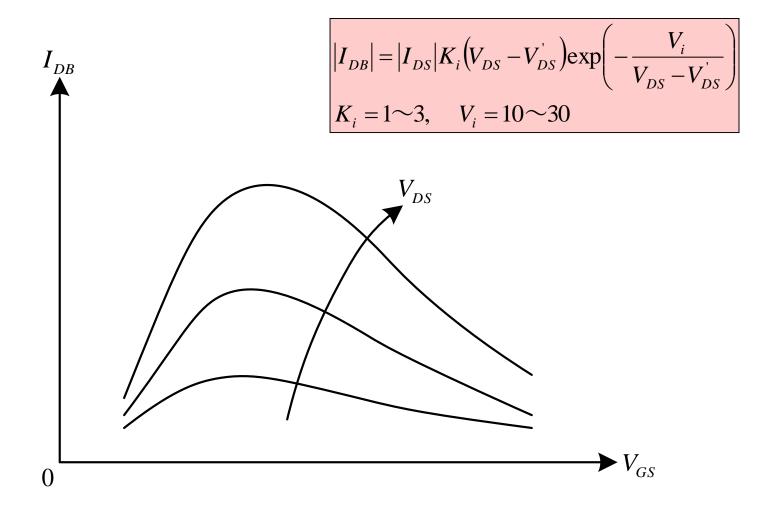
$$I_{DS} = \frac{W}{L} \mu C_{ox} \frac{(V_{GS} - V_T)^2}{2\alpha}$$
 $I_{DS} \approx WC_{ox} (V_{GS} - V_T) \mu E_c$ I_{DS} I_{DS}

ホットキャリア効果

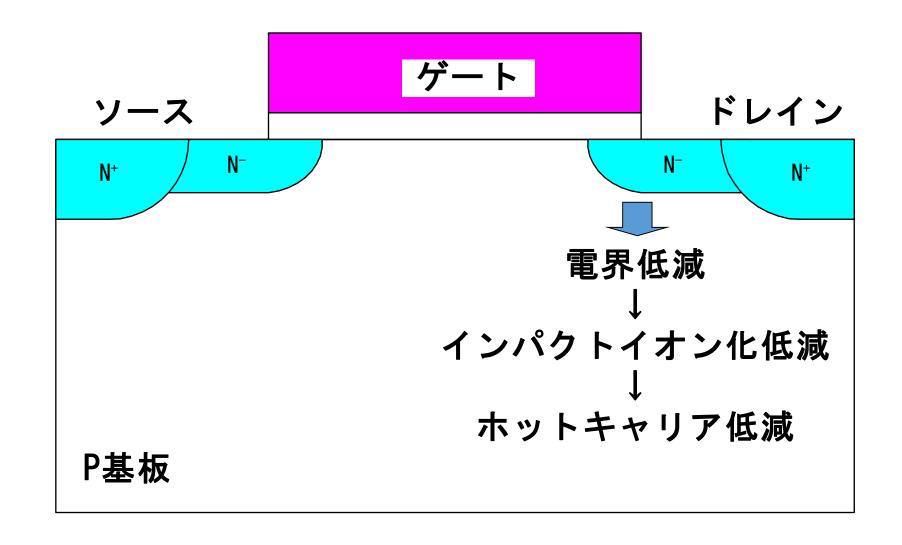


- ・電子/正孔トラップ
- •過剰界面準位
- ・閾値電圧上昇 ソース・ト・レイン逆方向 閾値電圧上昇顕著
- ・ト・ライフ・能力低下 ト・レイン抵抗増加

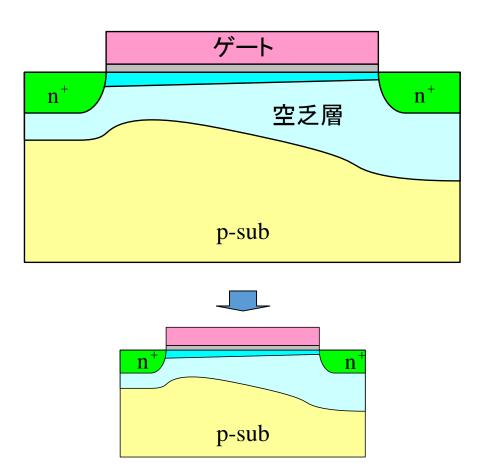
基板電流vs.ゲート~ソース電圧



ホットキャリア対策(LDDトランジスタ)



スケーリング



定電界スケーリング(1)

デバイスが $1/\kappa$ (3次元)になる。

$$\Rightarrow L, W, t_{ox}, d_j: 1/\kappa$$

空乏層幅も $1/\kappa$ にする。

$$\Rightarrow N_A: \kappa, \quad V: 1/\kappa, \quad \left[$$
空乏層幅: $d = \sqrt{\frac{2\varepsilon_s}{qN_A}(\phi_{bi} + V)}\right]$

この場合、動作電圧及び閾値電圧も、1/κにする。

容量Cは、単位面積当りの増加と面積縮小から、 $\kappa(1/\kappa^2)=1/\kappa$ になる。また、 γ は以下になる。

$$\Rightarrow \gamma: 1/\sqrt{\kappa} \qquad \left[\gamma = \sqrt{2q\varepsilon_s N_A} / C_{ox} \right]$$

$$Q_B$$

定電界スケーリング(2)

ドレイン電流
$$\Rightarrow (\kappa)(1/\kappa^2) = 1/\kappa: \qquad (容量) \bullet (電圧) \bullet (電圧)$$

$$I_{DS} = \frac{W}{L} \mu C_{ox} \left[(V_{GS} - V_T) V_{DS} - \frac{\alpha}{2} V_{DS}^2 \right]$$
弱反転領域での $\log I_{DS} \text{vs.} V_{GS}$ の傾き $(V_{DS} - \mathbb{E})$

$$\Rightarrow (1/\sqrt{\kappa})/(1/\sqrt{\kappa}) = 1: \qquad (\gamma)/\sqrt{(電圧)}$$

$$\left(n = 1 + \frac{\gamma}{2\sqrt{2\phi_F} + V_{SB}} \right)$$
単位面積当り消費電力
$$\Rightarrow (1/\kappa)(1/\kappa)/(1/\kappa^2) = 1: \qquad (電圧) \bullet (電流)/(面積)$$

定電界スケーリング(3)

容量充電の変化率

$$\Rightarrow (1/\kappa)/(1/\kappa) = 1$$
: (電流)/(容量)、 $dV/dt = I/C$

容量充電時間

$$\Rightarrow 1/\kappa$$
, (:: 容量充電の変化率=1、電圧: $1/\kappa$)

回路スピード

$$\Rightarrow \kappa$$

電力遅延積 (パワーディレイプロダクト)

$$\Rightarrow (1/\kappa^2)(1/\kappa) = 1/\kappa^3$$
:

(トランジスタ当りの消費電力●(容量充電時間)

定電界スケーリング(4)

配線内の電流密度

$$\Rightarrow (1/\kappa)/(1/\kappa^2) = \kappa$$

(電流)(配線断面積)

配線抵抗

$$\Rightarrow (1/\kappa)/(1/\kappa^2) = \kappa$$

(配線長)(配線断面積)

配線の容量と抵抗からの時定数

$$\Rightarrow (1/\kappa)\kappa = 1$$

(配線容量●(配線抵抗)

配線内での電圧低下

$$\Rightarrow (1/\kappa)\kappa = 1$$

(電流)(配線抵抗)

コンタクト抵抗

$$\Rightarrow \kappa^2$$

(コンタクト面積: $1/\kappa^2$)

コンタクトでの電圧低下

$$\Rightarrow (1/\kappa)\kappa^2 = \kappa$$

(電流) (コンタクト抵抗)

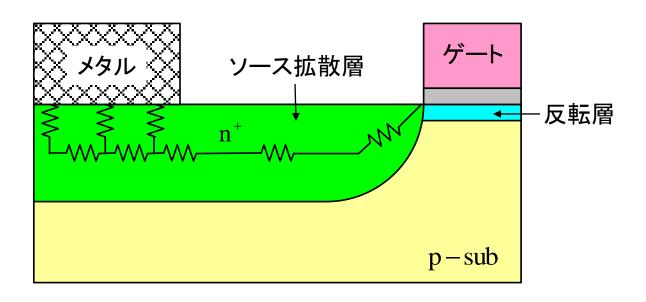
定電界スケーリング・ファクター

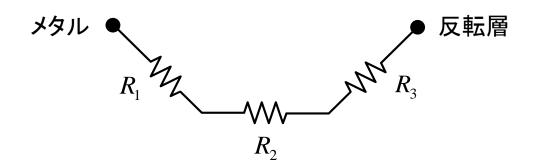
量	スケーリング・ファクター
デバイス・ディメンジョン L, W, t _{ox} , d _j	$1/\kappa$
面積	$1/\kappa^2$
パッキング密度(単位チップ当りのデバイス数)	κ^2
ドーピング密度 N _A	κ
バイアス電圧と V⊤	$1/\kappa$
バイアス電流	$1/\kappa$
電力消費(一定の回路当り)	$1/\kappa^2$
電力消費(単位チップ当り)	1
容量 C	$1/\kappa$
容量(単位面積当り) C'	κ
電荷 Q	$1/\kappa^2$
電荷(単位面積当り) Q'	1
電界強度	1
基板バイアス係数 γ	$1/\sqrt{\kappa}$
トランジスタ通過時間 で	$1/\kappa$
トランジスタ電力・遅延積	$1/\kappa^3$

スケーリングの規則

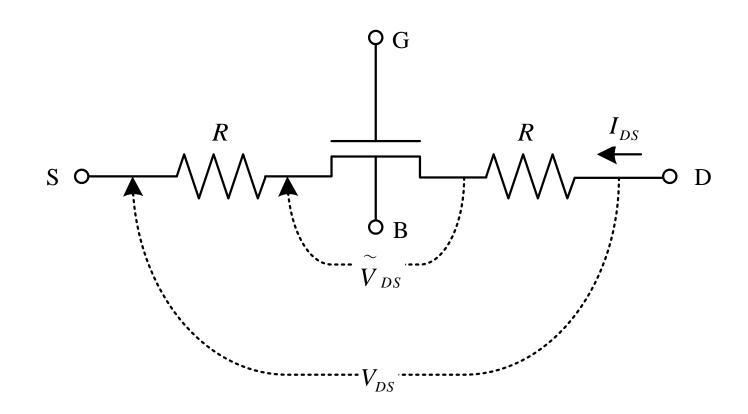
	スケーリング・ファクター			
量	定電界 スケーリング	定電圧 スケーリング 1 < κ' < κ	準定電圧 スケーリング 1< κ' < κ	一般化された スケーリング 1< κ' < κ
W, L	$1/\kappa$	1/ <i>κ</i>	$1/\kappa$	1/ <i>κ</i>
t _{ox}	$1/\kappa$	1/κ '	1/κ	1/ <i>K</i>
N _A	κ	К	K	κ^2/κ
V, V _T	$1/\kappa$	1	$1/\kappa$	$1/\kappa$

ソースとドレイン抵抗





ソースとドレイン抵抗を入れたMOSトランジスタ



ソースとドレイン抵抗の解析(1)

実効的なドレイン~ソース電圧VDSは、

$$\overrightarrow{V}_{DS} = V_{DS} - 2RI_{DS}$$

で表される。以下の式において、 V_{DS} を V_{DS} で置換える。

$$I_{DS} = \frac{W}{L} \mu C'_{ox} \left[(V_{GS} - V_T) V_{DS} - \frac{\alpha}{2} V_{DS}^2 \right]$$

更に、 $V_{GS}-V_T$ への RI_{DS} の寄与は少ないとし、いま V_{DS} の小さい場合を考え $(\alpha/2)V_{DS}^2$ の項は、無視できるものとすると、

$$I_{DS} \approx \frac{W}{L} \mu C_{ox} (V_{GS} - V_T) \widetilde{V}_{DS}$$

となる。これから、 I_{DS} を解くと、以下になる

$$I_{DS} = \frac{\mu C_{ox}'(W/L)}{1 + \beta_R (V_{GS} - V_T)} (V_{GS} - V_T) V_{DS}, \qquad \beta_R = \frac{2\mu C_{ox}'RW}{L}$$

ソースとドレイン抵抗の解析(2)

得られた電流式の μ に以下の μ_{eff} を代入すると、

薄い酸化膜と高ドーピングの効果

(1) 量子効果によるゲート酸化実効膜厚の増大

(量子論によるキャリア分布:チャージシートモデルの限界)

$$\hat{t}_{ox} = t_{ox} + \frac{\mathcal{E}_{ox}}{\mathcal{E}_{s}} d_{m}, \quad d_{m} = B_{1} \left| Q_{B}^{'} + \frac{11}{32} Q_{I}^{'} \right|^{-1/3} \qquad (B_{1} \approx 10^{-9} (\text{C} \cdot \text{cm})^{1/3})$$

(2) ポリシリコンゲートの空乏化

$$\hat{t}_{ox} = t_{ox} + \frac{\mathcal{E}_{ox}}{\mathcal{E}_{s}} \left(d_{m} + d_{p} \right)$$

(3) 量子効果による V_{T0} の増大効果(反転層電荷の量子化)

(4) ゲート絶縁膜を通してのトンネル効果: ゲート酸化膜の限界≈15Å

電流式に考慮すべき微細サイズ効果

- ・ 閾値電圧の変化
 - チャネル長Lの影響:短(逆短)チャネル効果
 - ・チャネル幅Wの影響:狭(逆狭)チャネル効果
 - ・ドレイン電圧V_{DS}の影響(DIBL)
- ・高電界による移動度の低下
 - ・ キャリアの表面散乱(電流と垂直方向)
 - ・ キャリアの速度飽和(電流の方向)
- 飽和領域におけるチャネル長変調

微細サイズ効果を取込んだ電流式

実効閾値電圧

$$\hat{V_T}(L, W, V_{DS}, V_{SB}) = V_T(V_{SB}) + \Delta V_{TL}(L, V_{DS}, V_{SB}) + \Delta V_{TW}(W, V_{SB})$$

非飽和領域の電流: $V_{DS} \ll V_{DS}$

$$I_{DS} = \frac{\mu C_{ox} \frac{W}{L} \left\{ \left[V_{GS} - \hat{V_T} (L, W, V_{DS}, V_{SB}) \right] V_{DS} - \frac{\alpha}{2} V_{DS}^2 \right\}}{\left\{ 1 + \theta \left[V_{GS} - \hat{V_T} (L, W, V_{DS}, V_{SB}) \right] + \theta_B V_{SB} \right\} \left[1 + V_{DS} / (L E_c) \right]}$$

飽和領域の電流: $V_{DS} \gg V_{DS}$

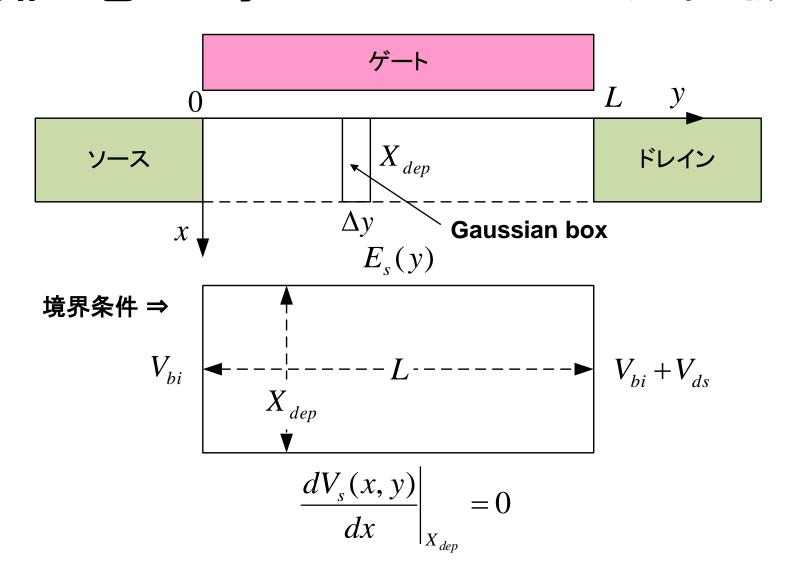
$$I_{DS} = \frac{\mu C_{ox} \frac{W}{L} \left\{ \left[V_{GS} - \hat{V_T} (L, W, V_{DS}, V_{SB}) \right] V_{DS} - \frac{\alpha}{2} V_{DS}^{'2} \right\}}{\left\{ 1 + \theta \left[V_{GS} - \hat{V_T} (L, W, V_{DS}, V_{SB}) \right] + \theta_B V_{SB} \right\} \left[1 - \frac{l_p}{L} + V_{DS}^{'} / (L E_c) \right]}$$

付録

BSIMでのMOSFET閾値電圧

(短チャネル効果: 擬似2次元)

閾値電圧導出:短チャネル効果(擬似2次元)



記号の定義と境界条件

Gaussian boxにGaussの法則適用(1)

y方向電界のフラックス

$$\begin{split} & \left[E_{y}(x, y + \Delta y) - E_{y}(x, y) \right] X_{dep} \\ & = \frac{E_{y}(x, y + \Delta y) - E_{y}(x, y)}{\Delta y} X_{dep} \Delta y = \frac{\Delta E_{y}}{\Delta y} X_{dep} \Delta y \end{split}$$

Gaussの法則

$$\int_{S} \mathbf{E} \bullet \mathbf{n} dS = \int_{V} \frac{\rho}{\varepsilon_{si}} dv$$

×方向電界のフラックス

$$\begin{split} \left[E_{x}(X_{dep}, y) - E_{x}(0, y)\right] \Delta y &= -\frac{\left(V_{gs} - V_{FB} - V_{s}(y)\right)C_{ox}}{\varepsilon_{si}} \Delta y \\ E_{x}(X_{dep}, y) &= 0 \\ \varepsilon_{si}E_{x}(0, y) &= \left(V_{gs} - V_{FB} - V_{s}(y)\right)C_{ox} \end{split}$$

Gaussian boxにGaussの法則適用(2)

Gaussの法則の適用

$$\frac{\Delta E_{y}}{\Delta y} X_{dep} \Delta y - \frac{\left(V_{gs} - V_{FB} - V_{s}(y)\right)C_{ox}}{\varepsilon_{si}} \Delta y = -\frac{qN_{peak}}{\varepsilon_{si}} X_{dep} \Delta y$$

$$\Delta y \to 0, \quad E_{y}(x, y) \to E_{y}(0, y) = E_{s}(y), \quad X_{dep} \to X_{dep}/\eta$$

$$-\varepsilon_{si} \frac{X_{dep}}{\eta} \frac{dE_{s}(y)}{dy} + \left(V_{gs} - V_{FB} - V_{s}(y)\right)C_{ox} = qN_{peak}X_{dep}$$

$$E_{s}(y) = -dV_{s}(y)/dy, \quad C_{ox} = \varepsilon_{ox}/T_{ox}$$

$$\varepsilon_{si} \frac{X_{dep}}{\eta} \frac{d^{2}V_{s}(y)}{dy^{2}} + \varepsilon_{ox} \frac{V_{gs} - V_{FB} - V_{s}(y)}{T_{ox}} = qN_{peak}X_{dep}$$

 X_{dep}/η \Rightarrow チャネルに沿う空乏層幅の平均 η \Rightarrow フィッテングパラメータ

表面電位の微分方程式

下記微分方程式を解く

境界条件
$$V_s(0) = V_{bi}, V_s(L) = V_{ds} + V_{bi}$$

$$\varepsilon_{si} \frac{X_{dep}}{\eta} \frac{d^2 V_s(y)}{dy^2} + \varepsilon_{ox} \frac{V_{gs} - V_{FB} - V_s(y)}{T_{ox}} = q N_{peak} X_{dep}$$
(1-1)

(1-1)式の整理 (基板電位:グラウンド)

$$\frac{d^{2}V_{s}(y)}{dy^{2}} - AV_{s}(y) = B$$

$$A = \frac{\varepsilon_{ox}\eta}{\varepsilon_{si}X_{den}T_{ox}}, B = \frac{\eta qN_{peak}}{\varepsilon_{si}} - \frac{\varepsilon_{ox}\eta}{\varepsilon_{si}X_{den}T_{ox}} \left(V_{gs} - V_{FB}\right)$$

表面電位の解法: 微分方程式を解く(1/5)

(1-2)式の同次式

$$\frac{d^2V_s(y)}{dy^2} - AV_s(y) = 0 {1-3}$$

(1-3)式において、 $V_s(y) = e^{\rho y}$ とおくと、

$$\rho^2 - A = 0 \quad \Rightarrow \qquad \rho = \pm \sqrt{A} \tag{1-4}$$

となる。従って、以下を得る。

$$V_s(y) = C_1 e^{\sqrt{A}y} + C_2 e^{-\sqrt{A}y}$$
 C_1, C_2 : 任意定数 (1-5)

次に、

$$\frac{d^2V_s(y)}{dy^2} - AV_s(y) = B \tag{1-6}$$

の解を、 C_1 , C_2 をyの関数と見なして

$$V_s(y) = C_1(y)e^{\sqrt{A}y} + C_2(y)e^{-\sqrt{A}y}$$
 (1-7)

とする。(定数変化法

表面電位の解法: 微分方程式を解く(2/5)

(1-7)式の1階微分は以下となる。

$$\frac{dV_s(y)}{dy} = C_1 \sqrt{A} e^{\sqrt{A}y} - C_2 \sqrt{A} e^{-\sqrt{A}y} \tag{1-8}$$

ここで、以下とおいた。

$$C_1' \sqrt{A} e^{\sqrt{A}y} + C_2' \sqrt{A} e^{-\sqrt{A}y} = 0$$
 (1-9)

(1-7)式の2階微分は(1-8)式から以下となる。

$$\frac{d^{2}V_{s}(y)}{dv^{2}} = C_{1}^{'}\sqrt{A}e^{\sqrt{A}y} + C_{1}Ae^{\sqrt{A}y} - C_{2}^{'}\sqrt{A}e^{-\sqrt{A}y} + C_{2}Ae^{-\sqrt{A}y}$$
(1-10)

(1-7)式と(1-10)式を(1-6)式に代入すると、以下を得る。

$$C_1' \sqrt{A} e^{\sqrt{A}y} - C_2' \sqrt{A} e^{-\sqrt{A}y} = B$$
 (1-11)

表面電位の解法:微分方程式を解く(3/5)

(1-9)式と(1-11)式から以下を得る。

$$C_{1}' = \frac{B}{2\sqrt{A}}e^{-\sqrt{A}y} \tag{1-12}$$

$$C_{2}' = -\frac{B}{2\sqrt{A}}e^{\sqrt{A}y} \tag{1-13}$$

(1-12)式と(1-13)式から、以下を得る。

$$C_1(y) = -\frac{B}{2A}e^{-\sqrt{A}y} + D_1 \tag{1-14}$$

$$C_2(y) = -\frac{B}{2A}e^{\sqrt{A}y} + D_2$$
 D_1, D_2 : 任意定数 (1-15)

(1-14)式と(1-15)式を(1-7)式に代入して、以下を得る。

$$V_{s}(y) = -\frac{B}{A} + D_{1}e^{\sqrt{A}y} + D_{2}e^{-\sqrt{A}y}$$
 (1-16)

表面電位の解法:微分方程式を解く(4/5)

境界条件 $V_s(0) = V_{bi}, V_s(L) = V_{ds} + V_{bi}$ を (1-14)式に適用して、以下を得る。

$$D_1 + D_2 = \frac{B}{A} + V_{bi} \tag{1-17}$$

$$D_1 e^{\sqrt{A}L} + D_2 e^{-\sqrt{A}L} = \frac{B}{A} + V_{ds} + V_{bi}$$
 (1-18)

これから、 D_1 と D_2 は以下となる。

$$D_{1} = \frac{1}{2\sinh\left(\sqrt{A}L\right)} \left[\frac{B}{A} + V_{ds} + V_{bi} - \left(\frac{B}{A} + V_{bi}\right)e^{-\sqrt{A}L}\right]$$
(1-19)

$$D_2 = \frac{1}{2\sinh\left(\sqrt{A}L\right)} \left[-\left(\frac{B}{A} + V_{ds} + V_{bi}\right) + \left(\frac{B}{A} + V_{bi}\right) e^{\sqrt{A}L} \right]$$
(1-20)

表面電位の解法:微分方程式を解く(5/5)

 D_1 と D_2 を(1-16)式に代入して整理すると、 $V_s(y)$ は以下になる。

$$\begin{split} V_{s}(y) &= -\frac{B}{A} + \frac{\sinh\left(\sqrt{A}y\right)}{\sinh\left(\sqrt{A}L\right)} \left(\frac{B}{A} + V_{ds} + V_{bi}\right) + \frac{\sinh\left[\sqrt{A}(L-y)\right]}{\sinh\left(\sqrt{A}L\right)} \left(\frac{B}{A} + V_{bi}\right) \\ &= V_{sL} + \left(V_{bi} + V_{ds} - V_{sL}\right) \frac{\sinh\left(\frac{y}{l_{t}}\right)}{\sinh\left(\frac{L}{l_{t}}\right)} + \left(V_{bi} - V_{sL}\right) \frac{\sinh\left(\frac{L-y}{l_{t}}\right)}{\sinh\left(\frac{L}{l_{t}}\right)} \\ &= C &\sim \\ &- \frac{B}{A} = V_{gs} - \left(V_{FB} + \frac{qN_{peak}X_{dep}T_{ox}}{\varepsilon_{ox}} + \phi_{s}\right) + \phi_{s} = V_{gs} - V_{th0} + \phi_{s} = V_{sL} \\ &\sqrt{A} = \frac{1}{l_{t}} \end{split}$$

表面電位の解

表面電位のチャネル位置依存性

$$V_{s}(y) = V_{sL} + (V_{bi} + V_{ds} - V_{sL}) \frac{\sinh(y/l_{t})}{\sinh(L/l_{t})} + (V_{bi} - V_{sL}) \frac{\sinh((L/l_{t}))}{\sinh((L/l_{t}))}$$

$$V_{sL} = V_{gs} - V_{th0} + \phi_s$$
 ⇒ 長チャネル表面電位
$$V_{th0} = V_{FB} + \frac{qN_{peak}X_{dep}T_{ox}}{\mathcal{E}_{ox}} + \phi_s$$
 ⇒ 長チャネル閾値電圧

閾値電圧:短チャネル効果(擬似2次元)

 $V_{ds} \ll V_{bi} - V_{sL}$ の場合の表面電位最小位置

$$V_{s \min} = V_s(y_0) \rightarrow y_0 \cong L/2$$

最小表面電位

$$V_{s\min} = V_{sL} + \left[2(V_{bi} - V_{sL}) + V_{ds}\right] \frac{\sinh(L/2l_t)}{\sinh(L/l_t)}$$

閾値電圧 $V_{s \min} = \phi_s$, at $V_{gs} = V_{th}$

$$V_{th}(L) = V_{th0} - \frac{[2(V_{bi} - \phi_s) + V_{ds}]}{2\cosh(L/2l_t) - 2} \equiv V_{th0} - \Delta V_{th}$$

閾値電圧変化:短チャネル効果(擬似2次元)

近似 $l_t \ll L$

$$\frac{1}{2\cosh(L/2l_t)-2} = \frac{1}{e^{L/2l_t} - e^{-L/2l_t} - 2}$$

$$\approx \frac{e^{-L/2l_t}}{1-2e^{-L/2l_t}} \approx e^{-L/2l_t} \left(1 + 2e^{-L/2l_t}\right) = \left(e^{-L/2l_t} + 2e^{-L/l_t}\right)$$

短チャネル効果による閾値電圧変化

$$\Delta V_{th}(L) = \left[2(V_{bi} - \phi_s) + V_{ds} \right] \left(e^{-L/2l_t} + 2e^{-L/l_t} \right)$$